IMAJ ニューズ
NO.8
国際MRA日本協会機関誌
発行年月日　昭和51年6月25日
発行所　国際MRA日本協会
発行者　柳沢錬造
（非売品）　TEL. 03－374－7600
INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

新しい民族の誕生

―北米に吹く精神革命の新風―

オタワ会議に集まった7人の酋長

テレビのスイッチを入れると、騎兵隊がインディアン達を谷間に追いつめて、屠殺している残酷シーンが目に入ってくる。西部劇映画特有の見せ場だ。北米に住むインディアンの人々は次から次に封切りされるそれらの映画にどんな気持を抱いているのだろうか、と思いをはせる日本人は少い。

筆者は、アメリカの南部の中心都市アトランタで「戦場に架ける橋」をイギリス青年と見たことがある。骨と皮にやせこけた英豪軍が日本軍の銃口を背に、よたよたと行軍している場面がスクリーンいっぱいに写し出されると、館内は憎悪で放射能をおびたような異様な雰囲気になり、今にも私は背後から締め殺されるのではないかと感じ、背すじが氷をあてられたようにゾーっと冷たくなったのを生々して覚えている。

白人達が幌馬車に乗って西部にやって来た頃、青いシャツを着たインディアンの酋長がいた。開拓者達は彼をブルージャケットと呼んだ。それが酋長の名前となった。この一族のお嬢さんであるブルージャケットさんが東京のMRAハウスに来ておられた。彼女は、「白人達が変わるとは夢にも思いませんでした。MRAは白人達を変え、私たちも変わり、共に人間として友として差別の無い、思いやりと協力の一家のような新しい社会づくりをやっています。ですから、MRAは世界共通の新しい民族を生んでいるようなものです」と感想を洩らしておられたが、それが如何に革命的なことであるかという実感を持ったのはアメリカ各地を訪れたときであった。そうして、「相手が悪くなると、自分が正しくなったような錯覚をおこして、相手と同じ間違いを自分はしてしまうものだ」ということも気付かせてもらった。

今、北米に精神革命の新風が吹いている。それは、欧州各国に大きな反響を残した「アジアの歌」と青年達の一行が、カナダに招待されたからである。この一行はカナダ各州政府や各インディアン部族から温かい歓迎をうけ、各民族間に新しい精神的共通基盤を築いている。この「アジアの歌」の一行は、偏見と憎しみ、分裂を生む西部劇映画を製作する人々のかたくな心への回答であり挑戦である。

この一行に日本から藤田、平沢、長野の諸君が加わって、アジアの青年達と日夜、寝食も忘れて献身していることを、ぜひ皆さんに知っていただき、ご一緒に北米での健闘を祈りたいと願っている。

（座木）

世界を結ぶ〝四つの柱〟

―南北問題に われわれはどう取り組むべきか―

国連で経済・社会部門を担当するイギリス代表マッケンジー氏は最近、ロンドンで「国連三十年を省みて」と題する演説を行なった。

「国連はその発足当初から現在まで、概括すれば三つの時代を経験して来た。最初は米ソ二大大国の対立による冷戦の時代、次はアジア、アフリカの殖民地が次々に独立した時代、そして三番目が現在のように、南北の貧富の差が顕在化し、これがさまざまの問題を提起し、一方では低開発国の開発が進捗している時代であり、この時代はさらに一九八〇年まで続くであろう。そしてこの南北問題をどう扱かうかが今後われわれに課せられた一大テーマとなるだろう。」マッケンジー氏はこう前置きしてイギリス国民に対し、イギリスが直面している南北問題取り組みの重要性を訴えた。

「われわれは既に一昨年（一九七四年）五月にも本国政府に対し特にこの点を強く主張した。政府もわれわれの訴えをとりあげ、特別委員会を設けて資源に関するイギリスの対外依存度の長期的な展望について再検討し、まさに出来んとしつつある世界経済新秩序のなかで、わがイギリスがいかなる地位を占めるかを検討することを約した。昨年一月、ウイルソン首相はカナダに飛んでトリユドー首相と会い、イギリスの第三世界（発展途上国）に対する政策の大綱はかくして出来上ったのである。アメリカ首脳部との会談、英連邦首相会議等を経て、同年九月、これが国連第七回特別会議における前進したイギリスの態度となって現れたのである。」

「むろんまだ全面的な解決には程遠いと言わざるをえない。しかし、『国富論』の著者、アダム・スミスも言っているように、『地域社会の大きな部分が極端に貧しい状態にとどまっているかぎり、その社会の健全な繁栄などありえない』のであり、つまり、われわれにとって、南北問題は、どうしても避けて通ることのできない問題なのである。」

国連に加盟する一四四か国の主権国家の間で何らかの実りある対話が成り立つために、マッケンジー氏は〝四つの柱〟がぜひとも必要だと強調する。四つの柱とは何か。

「第一は教育である。世界が現実に直面している課題を、社会的に影響力を持つグループの人々に説明し、納得し、理解してもらわなければならない。このグループとは、たとえば、労働組合である。実業界である。専門的な職業を持つ人たちのグループである。それぞれ利害が異なり、しかも緊密に影響しあっている。ウイルソン首相が指摘したように、『こちらで給与があがったといって喜べば、むこうで物価があがったといって悲しむ』関係なのである。われわれはこれを国際的規模においてもつねに考えていなければならない。一国の国民の給与があがるということは、他国の国民の物価があがるということを意味する時代なのである。」

「第二は援助に関してお互いにもっと率直になること。援助を与える西側工業諸国は援助の可能額に対して今までより正直になるべきだ。援助を受ける第三世界の側にも、『正直』の徳目を要求したい。汚職の問題など、かって一度も国連の場で議題にのぼったことはない。それでは汚職はないのかと言えば、残念ながら、あるインドの銀行家の言によればなんと外国からの援助額の約六割は賄路（わいろ）となって失われるという。言いかえれば、手渡された金の約四割しか国民の手には届かぬということだ。発展途上国の食糧増産計画についてもしかり。額面と実際の収穫の間には大差があって、報告された額の半分しか収穫はあがっていないのだが、この問題も国連でとりあげられたことはない。」

「第三は発想の転換が必要だということ。誰が勝ったか、負けたかとかいうものの考えかたはもう止めよう。長い目で見れば、だれも負けたのではなく、だれも損をしたのではないという考えかたに変わらなくてならない。私個人としては、世界の富がすべての人を豊かにするために用いられ、少数者による搾取をなくすことは不可能ではないと固く信じている。もっともそれには神の慧知に知恵をもとめねばならないと思うが……。」

「そして最後に、これが最も大事な、基本的なことだが、経済的にも、社会的にも、国家的にも、国際的にも、『変化（チェンジ）』が待望されているということ。人間が変わることなどありえないという人もたしかにいるが、そういう人たちに対して、私は、かの高名なキッシンジャー博士の警告をおくって深いいましめとしたいと思う。それはこういう言葉だ。『もしわれわれが現在の状態を変えることなくゆけば、十年間で、世界は非常な混乱の状態に突入せざるをえないであろう。』

ヨーロッパから

兼松　めぐみ

皆様、御元気ですか。私はとても元気にしております。四月に入ってヒル・ファームでハワード夫人が大きなミーティングをされました。これはイギリスに住む若い人々のための会で約一五〇人程の人々が集まりました。日曜日だったのですが、丁度、お天気にも恵まれ、午前中はトラクター三台で牧場の中を見てまわり、昼食はすべての人々にテーブルが決められ、きれいに飾られて、私はハワード夫人と同じテーブルでした。午後三時から本格的な会がホールでおこなわれました。

四月十六日から十八日のイースターのときにはオランダで、これも若い人々のための大きな大会がおこなわれました。このイースター大会は、毎年場所を変えておこなわれ、去年はイギリスのエジンバラ、その前はベルリン、そして、今年はオランダで、私はこれに参加しました。　イギリスを十六日の朝早く出発して夕方オランダの目的地につきました。イギリスから約四〇人、ミニバス二台と自動車四台で行きました。オランダではあるミッションスクールを使って会議がおこなわれ、三日間とても充実したものでした。約二百人程のヨーロッパ各地からの若い人々が集まりました。「アジアの歌」の一行からは四人が特別に参加しました。藤田さんがその四人のひとりとして参加されたので、日本からは私と藤田さんの二人が参加しました。

まず第一日は開会の挨拶と、いろいろと建物の説明や各国の人々の紹介がありました。第二日目は朝七時三〇分からグループ集会がおこなわれました。これは各国の人々がより深くお互いに親ぼくを深めるためと、個人、個人が意見を述べることができるために組まれたものです。朝食のあとは大会がおこなわれ、それには、パフフマン氏が話されました。この人は以前、チェッコスロバキアに住んでいて、チエスの選手だった人で、MRAに会ってチエンジして、現在では西ドイツに住んでいます。前は共産主義の思想の中で生きてきた人で、本国では三回も投獄された経験があり、監獄に居るとき信仰を得て、共産主義の思想に反対して本国を出たそうです。

また、オックスフォードの青年グループが集会で、唄と寸劇をしました。これはガイダンスや信仰について、なぜガイダンスを持つかとか、なぜ信仰が大切であるかというものを短かい劇を通じて知らせるものです。とても良いものでした。

三日間、各国の若い人々と話すことができ、また、今夏、コーでの青年集会の足がかりとしても、とても貴重な経験でした。

藤田さんから、「アジアの歌」の一行に日本から青年がカナダで参加するということをききました。また、先週末にはロンドンで二日間大きな集会があり、約六百名の人々が参加したそうです。そこで藤田さんが話し、日中両国の歴史の中で、日本は中国にあやまらなければならないと言い、そして、日本の歌を中国語で唄ったそうです。その集会に参加していた中国の方々とも心が溶けあって友好を深めたと言っておられました。

ところで、コーの大会のニュースはもう日本にとどいていると思いますが、この手紙と共に招待状を一通送ります。コーの世界大会は七月十一日から九月二日まであります。そのうち青年集会は七月十一日から二十五日までです。

現在、私はパリーに居ますが、六月初めに一度、ケンブリッジにもどり、七月十日前後にイギリスからコーに行くつもりです。

日本からは今夏の大会にどなたが参加されるのでしょうか。首を長くしてお待ちしています。

（玉川大学学生）

カナダから

藤田　幸久

カルガリー市は話に聞いていたよりはるかに温かく、また、夜九時頃までも太陽が沈まないので、まるで南国の夏のです。大地は広々としたたずまいをみせています。

私たちは空港でインデアンの七つの部族の酋長と知事による独特の歓迎をうけました。そして、今までに幾つかの部族の居留地を訪れて交歓をしています。

九日、日曜日ですが、市の文化センターで第一回の「音楽の夕」を約五〇〇人の聴衆を集めて行ないました。この集会にあたっては私たちは「アジアの歌」を三分の二に要約し、それに新しい寸劇を加えて一つにまとめました。それは「アジアの歌」の構成メンバーであるインドの青年達が帰国するので、舞台装置も発送準備がされているため「アジアの歌」が上演できなかったからです。ですから、すべて代用品で何とかまにあわせました。

リハーサルに費やした甲斐があって、従来の「アジアの歌」に勝るとも劣らないものだとの評をいただきました。この新しい劇によって、今後のカナダの日程がどうゆう内容になるかが煮詰っていきそうです。

エドモントン市までの日程は前にお知らせしたとおりですが、その後、六月の初めにはオタワに向い、ケベックを含めて六月中は東部へ行く予定に変ります。それ以後については今は白紙の状態です。　続いてニュースをお知らせします。

（元国会議員秘書、青年部会員）

「私、このふしぎなもの」

陽光学院々長　山崎房一

久し振りの日曜日の朝、細川隆元先生の胸のすくような時事放談のあと、暖かい陽の光がさしこんでいる縁側で私は新聞を読んでいた。

「お父さん、桜の花が咲いたよ」と、五年生になったばかりの信三が走ってきた。

昨年の秋、裏庭から植えかえたときはこの桜には根がほとんどなかった。私はもう枯れたのでは、と心配していたので信三のあとを追った。

枯木のような枝にみどりの小さな芽が出て美しい八重桜が三輪、昨夜の雨滴にぬれながら寄りそうように咲いている。

不思議だなあ、暖かくなるとあのような黒ぽい枝から目がさめるような美しい花が咲く。

大自然の営みであろうか。私はこの大地のいのちあるものすべての若々しくて力強い息吹きをこの桜に限らずこの小さな庭すみにも感じる。

ごつごつした幹をなでながら、この桜の花の美しさを生み出す奇蹟のような桜のいのちに私は言葉を忘れるほどの感動を覚えた。

いのちといえば、この桜の木と同じように私にも両親からもらったいのちがある。

そうだ。この八重桜を美しいと思い、その不思議さに感動する私という人間そのものこそ考えてみるともっとも不思議なのではないだろうか、と、ふと気付いて我ながら驚いてしまったのだった。

考えてみると、この二つの目はもっとも技術の優れたどのテレビよりも性能がいいし、この耳も、どのイヤホーンよりもよくできている。口、鼻、手、足のどれをとってみてもこんなに便利で精巧によくできているものはない。それらがバラバラではなくみんな驚くほどよくチーム・ワークがとれている。その上、そのどれかが少しでも故障すると全部が一致協力して治そうとする。見事なものだ。

私は、朝出かけても夜には間違いなく我が家に帰ってくる。これは何でもないことのようだが、考えてみると実に不思議でならない。過去を記憶し将来のことまでも考えられる頭脳の働き。

もし、宇宙人が地球にやってきたとしたら、そのときいちばん驚いて感心するのはこの人間を見たときだろう。まさに、奇蹟のかたまりが歩いているように思うだろう。

歴史の流れとともにこの地球上には多くの人々が生れそして死んでいった。それらの人々の数は何十億にもなるだろう。過去から現在へ、そして未来へというこの日々の流れのなかで、正真正銘、他人ではなく自分が今ここに実際に生きていること。この自分と全く同じ人物は過去にも未来にも一人もいないというその自分の実存そのものが何とも不思議でならない。

このように不思議で素晴らしくよくできている自分を、なぜ今まで不思議だとも有難いことだとも気付かなかったのだろう。

長男の敬二郎にせがまれて私はサイクリング車を近所の自転車店から買ってやった。

「ありがとう、お父さん」

と、言ってピカピカに磨いている。だが、それから三週間もたった或る日、そのサイクリング車は無残にも泥んこで庭先に置かれてあった。

私の目も耳も鼻もこのサイクリング車と同じだ。

突然、私に目や耳が与えられるならば息子のサイクリング車以上に物凄く感動するにちがいない。これらは生れてからずっとついているからむしろ当り前だと思い、それに馴れてしまって有難さも素晴らしさも何も感じないでいる。だからそれらをとても粗末に扱ってしまう。ひとたび病気になるとその有難さをいやというほど思い知らされるのだが。

わかりきったことだが十才で老人にならないように私たちは大自然の巨大で規則正しい営みのなかで生かされている。このことを私はよく知ろうともしないで偉そうに振舞っている。自分がつつまれている大自然、或いは私自身がこの一部なのかもしれない、そのことについてあまりに無知な自分が恥かしくてならない。

そう思いつつも、生れたときからずっと私といっしょだったこの不思議で素晴らしい自分を発見したよろこびで胸がいっぱいだ。それが大自然の恵みであり、愛かもしれない。

「無事である今日一日が有難いことだな」と、心のなかが暖かくなってきた。この美しい桜の花しづくでほこりっぽい私の目も心も洗われたのだろう。

仏教でいう悟りとは奇蹟のような自分の不思議さ、素晴らしさをいつも新鮮に知ることではないだろうか。

信仰とはその自分の不思議さ素晴らしさを「有難いことだ」といつまでも思い続けることであろう。

そう理解すれば、「ありがたやうれしく帰るふるさとへ」と、書き残して八十才の生涯を閉じた母の信仰心がほんの少し私にもわかるような気がする。

大自然の巨大で規則正しい営みのなかで生かされている私が、その大自然のいのちの声を静かに聴き、良心の声かもしれない、そのいのちの声に聴き従って人々の幸せのために生きようと日々努めることが、この信仰心をより深めることになるのではないだろうか。

それが行（ぎょう）というものであろう。

私のような男がMRAに出合ったからこそこのような人間の幸せの本質に気付くことができたのであろう。

さっと吹いてきたそよ風に桜の花びらはひらひらと大地に還っていった。

（S・51・4・28記）